

十九世紀初頭の町と村

——糸魚川黒白騒動の分析を中心に——

鎌 田 永 吉

—

十九世紀初頭、すなわち天保改革の前夜に当る文化文政期の歴史的位⁽¹⁾置づけは、最近とみに試みられつつある。すなわち、この時期は、まず、江戸地廻り経済圏の発展に対応する幕府支配機構の再編・強化が進められる一方、中央市場の独占強化への都市商業資本の積極的動きと独占打破への新しい動向が激突しつ⁽²⁾つあり、その背景に化政期の農村の一般的「繁榮」があつたことはいうまでもない。これを地域市場の成立とい⁽³⁾うかたちでとらえることも可能であろう。一方、この時期の農民闘争は量的に停滞する反面、闘争形態が激化すると同時に、広域的特質を持つ事実も指摘されてい⁽⁴⁾る。

ところで、ここでとりあげる北陸地方の一小陣屋町糸魚川は、史料館機関研究の「近世城下町史料の基礎的研究」の対象地域の一つとして、東北・中国地方等の外様大藩城下町に対する北陸譜代小藩の陣屋町の例として取り上げられたものであるが、この地域に関する系統的研究の成果報告はまことに乏しく、⁽⁵⁾そこでの史料研究に当たっても、かなりの隘路に逢着することは否定できない。

一般に、城下町史料の基本的存在形態を確定することはきわめて困難な作業に属する。個々的には、例えば、町年寄(惣町横断・商人司・領内割元なども含めた)や町庄屋の「御用留」の成立年代確定とその意味の把握、記載形式・内容の相互比較検討などは勿論、「相場書上」ひとつをとってみても、その目的・性格・記載形式・機能等の時代的・地域的差異の確定などは、城下町史料の基本的類型・整理分類基準の確定や一般に古文書学的研究の基礎的・体系的作業として重要視されるべきものであるが、その前提としては、一定程度の、その領国の構造——支配制度・機構、租税体系、さらに生産構造や市場関係等に関する基礎的事実の把握が必要であることも否定できない。

本稿は、当面この目的に添って、文政二年に糸魚川地方に発生したいわゆる黒白騒動を素材に、十九世紀初頭における当地方の政治的・社会的矛盾の集中的表現形態を捉え、それによって、この時期の町と村の歴史的諸関係を具体的に確定しようとするものである。この作業は、それ自体、一面、先の幕末期の報告に続くものであるとともに、本来ここでまとめて取扱うべき、明治二年に発生した根知谷西浜一帯のいわゆる賈金騒動の分析を予定しているものがあり、同時に、近世陣屋町史料の基礎的研究のための前提をなすものである。

註

史学研究三一九の問題提起。

- (1) 当面、北島正元『化政期の政治と民衆』(岩波講座、日本歴史、近世5)が最もすぐれた包括的問題提示をしている。
- (2) さし当り、林玲子『江戸問屋仲間の研究』(一九六七、お茶の水書房)のとくに第三章、北島正元編『江戸商業と伊勢店』所収の松本四郎氏の菱垣廻船仲間成立の分析などの実証的成果参照。
- (3) 小野正雄『天保期を画期とした市場構成の変化』(歴史学研究三一九)の問題提起。
- (4) 青木虹二『百姓一揆の年次的研究』(一九六六、新生社)一〇七頁以降。激化の原因については林基氏の、好況による上層の戦線離脱、それによる貧農・半プロの孤立という指摘がある(同氏『百姓一揆の伝統』)。
- (5) その中で一九六一年刊行の青不重孝氏著『青海—その生活と発展—』は、糸魚川を含めた西頸城姫川流域の諸地帯についてきわめて要領良くまとめられた最近の良書である。

- (6) 拙稿『幕末・維新期の社会情勢』(上智史学十二)。

まず黒白騒動といわれるものをその事件の経過に沿って、主題に關係する内容を次の数項に要約しておこう。⁽¹⁾

(1) 文政二年八月二八日、郡代黒河九郎治から町年寄・割元に対して総額九、三七五兩の御頼金賦課が申渡された。賦課金額と人名は第1表のとおりである。

右の内、表下段の一、六八九兩は西浜割元・惣代七人(山崎・奥泉・岩崎・子田・松山(預)・竹田・関原)の丑年(文化一四)の見越出金分で、残り七、六八六兩と区別されている。九、三七五兩の「御帳面高」内訳は、

① 四千七百四拾兩 仲間十八人古才覺上納分

② 千六百八拾九兩 西浜割元惣代支配村々見越出金之分

③ 四百兩 下兩郷今度新出金之分

④ 千六百四拾三兩 町方金主名前四十人分

⑤ 内六百貳拾兩 寺町忠左左衛門幸左衛門大町源右衛門三人先納引之

⑥ 残而千三百壹兩 当上納之分

⑦ 九百三兩 西浜在方二十一人出金分

⑧ 内百兩 田海村忠左衛門の出金引之

となる。右の内、①は割元仲間古才覺上納分とあるが、他の記録がこれを「貸金トシテ上納シタル分」⁽²⁾と述べるように、既納分と推定しうる。また②は右記録に「是ハ以前割元七人ヨリ取換上納分」とあるごとく立替先納分と思われる(⑤・⑧は、ともに文化一五年以来の小林家「御用留」に登場する)。

第1表 大政二年御頼金割賦人の構成 (小林家「御用留」その他による)

御頼金高	人	名	役	職	町(村)内持高	諸 営 業
① 西 1,500	松	察右衛門	町年寄・用達		石 36,476	(酒造カ)
② 100	小山	与一 郎	(本陣)		16,836	酒造
③ 375	山崎	只右衛門	割元・用達 (川西カ)			
④ 700	関屋	徳右衛門	" " " " }	(下西郷)		
⑤ 426	目黒	仁左衛門	" " " " }			
⑥ 560	池奥	九八 郎	用達		43,410	廻船・酒造・信州商売
⑦ 60	岩子	七右衛門		(大和川村カ)		
⑧ 230	山崎	六三 郎	割元・用達加談			
⑨ 219	松田	榎四 郎	" " "		0,173	
⑩ 50	竹八	基五右衛門	" " "		1,160	
⑪ 207	田木	藤右衛門	割元次席・才覚加談		29,661	廻船・信州商売
⑫ 180	八木	茂三 郎	" " "		22,192	
⑬ 180	猪小	吉五 郎	" " "		(0,897)	
⑭ 150	山又	徳十 郎	" " "		6,717	
⑮ 20	猪関	七武喜	割元惣代 (田伏村)			
⑯ 15	原七	衛門	" " }	(下西郷)		
⑰ 412	寺大	衛門×			63,467	網船
⑱ 100	町海	衛門○			21,294	廻船 (34石積)・紺屋
⑲ 100	村新	衛門○			(天保14. 80,000)←	
⑳ 100	屋島	衛門△			5,132	廻船
㉑ 80	村紋	衛門○			6,285	請買船
㉒ 80	寺	門○				
㉓						
㉔						

80	村	又甚	右	門○
80	押上	儀	衛	助○
80	竹々花村	惣伊喜	門○	門○
60	田海村	四甚	右次	郎○
45	横	右右	衛	門○
45	〃	郎右	衛	門○
45	寺嶋	右左	衛	門○
45	村	衛	門○	門○
40	新屋	甚	門×	門○
40	新田	儀金	門○	門○
40	中谷内村	元仁	衛○	門○
40	竹々花村	之兵	兵	門○
35	横	兵	丞	衛○
35	〃	源喜	衛△	衛○
35	〃	仁五	衛○	衛○
35	新田	兵太	夫	衛○
33	〃	兵	衛○	衛○
33	大水	右左	衛○	門○
33	崎嶋	衛	門○	門○
30	村	九	郎×	吉
30	〃	三	七○	七○
30	大新	右右	門○	門○
30	田	衛	門○	門○
30	〃	衛	門○	門○
30	山口	衛	門○	門○
25	山	衛	門○	門○
25	新屋	衛	門○	門○
25	横	衛	門○	門○

町代 組頭 庄屋 組頭 組頭 庄屋

(慶応2. 62. 162)	
28. 577	信州商売
33. 189	(廻船)
天保14. 110. 000	
0. 369	問屋
0. 234	大工
83. 923	酒造
29. 986	請買船
0. 751	信州商売
0. 257	四十物・網船
21. 577	
0. 145	問屋
5. 578	(酒造カ)
0. 989	

52	25	新田町	平善	右	衛門	船庄屋	0.100	船商売
53	25	新田町	善清	之兵衛	六丞	船庄屋	4.364	船商売 (32石積)
54	25	〃	金茂	左四	衛門	船庄屋		酒造
55	25	竹ノ花村	甚長	衛門	〃		31.508	
56	25	大和川村	勘甚	左四	衛門		20.659	
57	25	〃	長勘	衛門	〃		13.462	
58	23	七間町	左四	衛門	〃		1.425	
59	23	〃	左四	衛門	〃		1.885	
60	23	〃	左四	衛門	〃		1.684	
61	23	大和川村	金九	衛門	〃			
62	23	山口村	次藤	衛門	〃		9.008	
63	20	山七間町	善喜	右兵衛	〃		3.447	
64	20	〃	善喜	右兵衛	〃		2.886	
65	20	〃	善喜	右兵衛	〃		12.452	
66	20	〃	善喜	右兵衛	〃			
67	20	海村	善喜	右兵衛	〃			
68	20	押上村	善喜	右兵衛	〃			
69	17	七間町	新文	左兵衛	〃			
70	17	〃	新文	左兵衛	〃			
71	17	〃	新文	左兵衛	〃			
72	17	大町	小利	左兵衛	〃			
73	17	〃	小利	左兵衛	〃			
74	17	〃	善久	左兵衛	〃			
75	17	大和川村	善久	左兵衛	〃			
76	17	〃	善久	左兵衛	〃			
77	17	田伏村	源折	右兵衛	〃			
78	13	新田町	源折	右兵衛	〃			

(寛政9.
万延元)

(慶応2.)

(船商売カ)

船商売

酒造

船商売 (32石積)

宿屋

⑦	13	大 町	松 五 郎 ×	0.438
⑧	13	"	次 郎 兵 衛	14.946
⑨	300		{ 関 屋 徳左衛門 田 黒 十左衛門 武 七 右 衛 門 }	
⑩	100	下 町 郷		
⑪	7,686	西浜割元惣代見越金		
⑫	1,689			
⑬	合計 9,275			

註 1) 人名のあとの記号のうち、○印=出所人、※=同左惣代、×印=病歿・若年・通達等で不参加、△=大坂より不帰人、他は不参加者。

2) 持高は、町方は文政五年「請印帳」、大和川村は天保五年「小前高帳」の数字。他は未確認。

3) () 内は推定。

この推定は、次の史料によつてともに先納立替金であることを確認しうる。

御借金之内割合之覚

御借金高壹万四千三百七拾兩也

此訳

金千六百八拾五兩ハ 七千石百姓方ハ差上置候御滞金高、但元金也、利米五升五ケ年御借置

同千六百兩ハ 御領中依御見立ニ差上置候御滞金高、但元金也、利足通五歩五ケ年御借置

同三千八拾六兩ハ 御在所町年寄割元御用達方ハ差上置候御滞金元利金高、内千兩余ハ松山ハ差上置候金高

同三千兩ハ 今度御頼金被仰付候八拾人之者共差上可申金高、但町年寄割元御用達加談人共十八人除之

同五千兩ハ 江戸御借財、内金貳千兩ハ大殿様御貯金、三千兩ハ御他借之事

つまり、江戸借金五千兩を除く九、三七一兩のうち六、三七一兩は在方先借(上納)金すなわち御滞金である。今

十九世紀初頭の町と村(鎌田)

度上納金は三、〇〇〇両(実は二、九四三両)であることがわかる。

大野村「記録留」が、「御用達町年寄割元十八人之者、差上置候金子、元利共引取申積ニ而、江戸御借財之方江ハ差向ケ不申積リ」と喝破している根拠はそこにあったことを確認しておこう。

各庄屋・被割賦人は、一宮社殿で会合して五カ年賦上納願を申出たが、町年寄・割元は実現の可能性なしとしてこれを取次がなかった。

(2)九月二日夜に、町・在六二軒の大戸に①江戸出訴、②町年寄松山察右衛門追放、③蜂起の趣意を記した張紙があり、同五日早朝に町方数名の出訴の事実が判明し、次いで在方出訴も明らかとなった。出訴人は総計四四名(表中〇

印のもの)。郡代・町年寄らはこの対策に追われた。

(3)一方、越訴勢出発の翌六日、羽生・村山山中に一揆勢が集合していたが、藩当局・町役人も気付いていなかった(略地図参照)。そして、突如一日一夜から、前記町年寄兼用達松山察右衛門居宅・土蔵、分家小松屋良八、弟の割元兼内用達談人松山楨四郎の各居宅・土蔵に打ちこわしがかけられる。一揆勢およそ二、〇〇〇名と町年寄は報告している。さらに別働隊およそ五〇〇名が陣屋に向かい、郡代黒河との面会を強要し、五箇条の要求書をつきつけた。翌一四日、一揆勢は増加して三千、四千名に達し、割元兼内用達談人子田六三郎・同竹田甚五右衛門・横町善五左衛門宅も打ちこわしはじめた。

(4)ところで、打ちこわし計画に連判しながら両日の行動に参加しない村があった。大野村はじめ根知谷一カ村がそれである。一揆勢はその背信行為を怒り、一五日夜を期しての町・在連合勢力による大野村打ちこわし計画を樹てていたが、根知谷勢はこれを

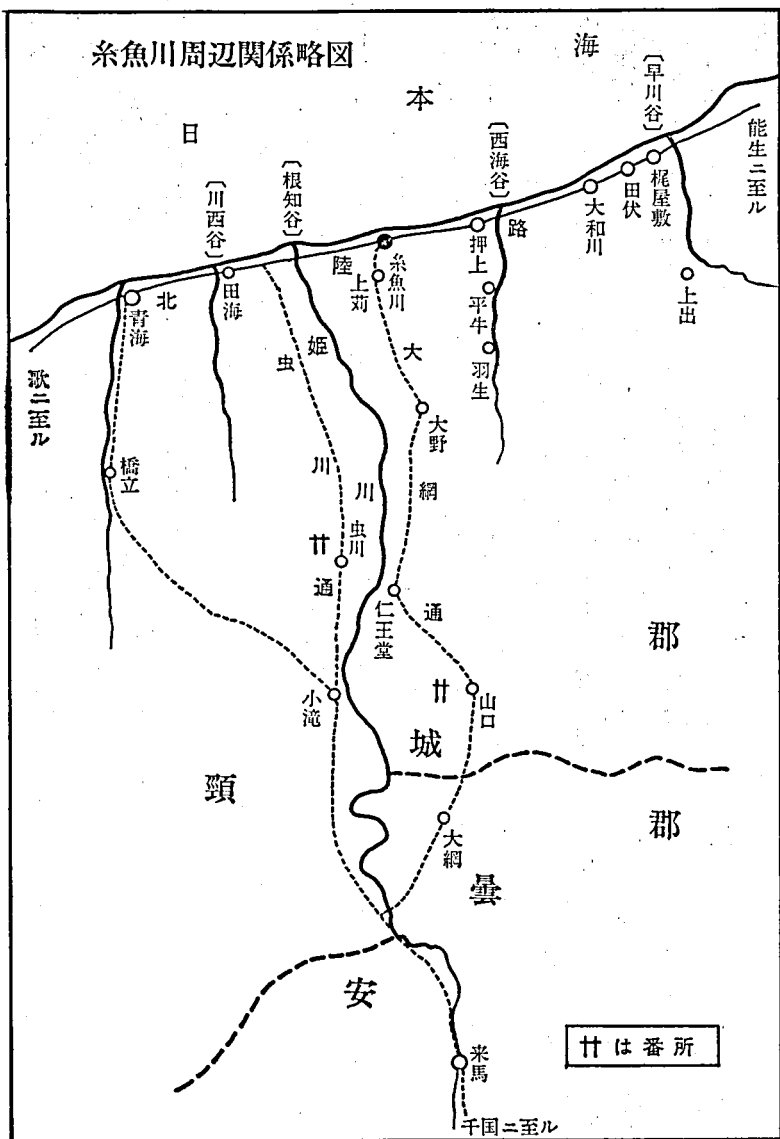
第2表 訴訟参加者の内訳

(第1表中⑨~⑪)

	町方	在方	計
① 出訴人	24 (1)	20 (4)	44 (5)
② 病氣・遠慮等	6 (1)	0	6 (1)
③ で不参り不帰	7	0	7
④ 大坂より不帰	3	1	4
⑤ 訴訟不参加者			

註. () 内は当時庄屋。

十九世紀初頭の町と村(鎌田)



知って逆に、町方攻撃のために同夜上荻村まで押寄せた(この動きは、二五日ごろまで続いていた)。しかし、一六日に至り、田沼領・加賀領、一八日に榊原領から総計八〇〇人が鎮圧出勤したため打ちこわしは終息する。

(5) つぎに、二七日には早川谷有間川村の田沼領惣代小峯市右衛門宅に放火があつて全焼し、さらに一〇月一日に小前百姓が蜂起して村々惣代宅を打ちこわし始めた。小峯のほか、井川原村由右衛門・上出村善右衛門・同音八・下出村半兵衛・川嶋村才三郎家がそれである。上出・下出は糸魚川領であり、下出は幕領相給である。

(6) 一方、出訴人は、一九日江戸屋敷で訴状を提出し趣意を陳弁している。

まず一八日には今井村金兵衛外五名が代表して、

我等町年寄之權威ニ恐、当惑仕候、依之不得止事江戸表へ直御上納御願申上度、家々出府仕候処、不斗落合候者、凡四拾余人……御在所御借財不残五七ヶ年之内無利足御借置之上、此度被仰付候御頼金七千六百八拾六両ヲ以三

四ヶ年ニ江戸表御借財被為解候様

と述べ、二一日に再度吟味に應じて訴意を陳述した。すなわち、直上納願は「御在所江差出候得者(町年寄割元加談人共々出金之引用者註) 利金のみニ相成」ることの防止のためであり、これを許されなければ「恨を含候趣、小前之者共之名前相認、落文致候儀ニ御座候」と脅迫し、過般之在所借金を江戸借財返済に充てること、小前への手当米も難波人同様施すべきことを主張している。二七日の吟味でも右の直上納の趣旨を、松山等の所業の具体例を挙げて敷衍して述べているが、小前手当米支給の件は小前の要求というよりは自分たちの判断である、と陳弁している。

さらに、享和年中の、信州下り荷物への新規庭銀(老駄に式分宛)取立てに触れて、「御上様之御益筋ニも不相成儀無謂、何之含ニ候哉、信州問屋之益而已ミ為致、糸魚川町在大勢之商人共ニ」は無益であるとしてその撤廃を要求している。

一方在所では、十八日に西浜領分町在四二カ村の村役人連名要求書が目附中村十太夫に提出されていたが、この内容が江戸出訴人の要求項目と若干ズレていることに注目したい。

(7) 吟味は翌年二月に在所で続けられた。出訴人惣代十名(表中※印)はその口書で、御頼金には見越金も含まれ全額実費上納ではないことを了承した(この言分には、前述のように疑問がある)としながらも、増庭銀撤廃はなお強く要求している。

結局、同一六日に、出訴庄屋六人閉門、越訴人五三人押込、町在庄屋三七人閉門、同組頭四二人押込、領中三七カ村過料錢五〇〇貫文と各々処分をうけ、前記被打毀人も役義召放と閉門、池原等四人御呵差控となった。しかしこれらの処分も、数日十数日でもいずれも解かれ、出訴人の犠牲は事実上皆無という越訴となった。郡代以下藩当局責任者が蟄居以下の処分をうけたことは勿論である。この訴訟が、当面、全般的に農民側に有利に結果したことをここでは指摘して、追及は措く。陣容を入れ替えた藩当局が、直ちに財政改革案を示して収奪を一時的に緩和せざるをえなかったことはその一つの証左である。

以上要約した事実の順序にほぼ即して、当面の問題点を大別して次の三点にまとめておく。

(A) まず御頼金九、三七五両賦課を打出した、この段階の藩財政の構造的特質Ⅱ矛盾は何か。藩当局は、何を、どのようなかたちで捕捉することによって当面する財政危機を乗切ろうとしたのか。また(1)において、年寄・割元・惣代等(以下これを特権層と表現する)の御頼金政策に果した役割・位置について若干指摘したことであるが、この特権層のこの段階における性格はいかに把握さるべきか。

(B) 出訴の狙いはいか。出訴者・同調者の特質を、攻撃対象たる特権層との対比においてどう捉えるか。

(C) 打ちこわしは、いかなる矛盾の所産として発生したのか(その社会・経済的背景は何か)。その内部矛盾、(B)・

(C)の相互関連、その総体としての歴史的特質は何か。

本稿は、ほぼ右の諸課題の解明を目的とするものであるが、糸魚川藩領の一九世紀初頭における個別分析、とくに社会・経済史的研究をそれ自体として意図したものではなく、騒動の過程に集中的に表現されていると思われる当該階の全般的矛盾の追求を行ない、包括的・展望的問題提示に重点をおいていく。経済的背景、とくに市場関係の分析については、とくに別掲の鶴岡論文を参照されたい。

註

(1) 以下、事件の経過に関する記述は、とくに断わらないかぎり、糸魚川市大町小林昭三氏所蔵「御用留」、同市御風記念館所蔵「糸魚川騒動記事」、同「黒貝騒動記」、同市大野中継所所蔵「記録留」などによる。

(2) 郷土研究会発行『西頸城郷土史料』第壹輯、一一一頁。

(3) 大野中継所蔵「従文政三庚辰歳至癸未年記録留」。

(4) 要約すれば①防火用水路埋立による町家大火招来、②町方に遊女屋設置、疫病蔓延、③天満宮社新建、城畑掠取、④御用金の恣意的賦課、⑤松山と結託、金利貪取である。(御風記念館蔵「黒貝騒動記」)

(5) 例えば、先年大火のため直指院地所にいる者へ、地代の他に頼金を申付け、未納者へは松山が立替えて利息をとり立てる例を挙げている(前出「騒動記事」)。

(6) 一、御直段之儀、御近領通用仕候様御取立被成下候

事、

一、去ル丑年々見越金并月割御滞金且御在所御借金不残返済可被仰付候事。

一、江戸御借金御返済之儀(者御在所)御用達方江安利二而御引替被仰談被下置候事。

一、御月割上納金之義者、月老割之御利足二而一ヶ月之金高御定被下置、年々御割合高下無之様被成下候事。

一、御冥加米、当卯分御免被成下度候事。

一、二月十月先納金之儀者、是迄御定式之通上納可仕候事文政二年九月十六日

(西浜御領分、町在四十二ヶ村百姓代・組頭・庄屋連印)

中村十兵衛様

(御風記念館蔵「糸魚川騒動記事」。一部大野中継所蔵「御用留」により補正)

(7)

『西頸城郷土史料』第壹輯に、「内八名ハ事済シタル

後モ家ニ歸ラザリシト云」とあるが、確認しえない。出

訴人は五三人と各書にあるが、病氣等不参者・△印の者を含む数となる。(第2表参照)

(8) 町方に提示された改革案は、①江戸為替月割金を、年間三、二〇〇両から向う七カ年二、八〇〇両に縮減、②

在所諸向入用金は三五〇両から二五〇両に縮減、③在所収納節約残額一、〇〇〇両を定法外に江戸借財返済に充当、米価高騰時は才覚金返済に充当、④月割上納金は年々高下なきよう定額、等々の内容を骨子とするものであった(前出「騒動記事」)。

三

結城秀康系の糸魚川藩主松平氏は、格式高い定府大名として、享和二年現在家臣十二名の陣屋詰による在所支配を行なっている⁽¹⁾のであるが、その一万三千石の支配領域頸城・魚沼両郡は大部分いわゆる越後山間地帯に属する。領地の六〇%を占める西浜領(前掲鶴岡論文参照)は、姫川流域に沿う根知谷下流の糸魚川周辺部に僅かに水田が展開する以外、多く山塊海岸に迫って七谷の流域に沿って聚落が散在し、北島正元氏によって中世的土豪の系譜を引く農奴主的地主支配の堅固な村落構造の地帯として特質づけられている⁽²⁾。低位な生産性、オヤカタ・コカタ関係とその下での高率小作料、商品生産の未展開による分解の停滞等は、農民経営の自立的発展を抑止する基礎的要件であり、地主―小作関係も当地域においては、幕末期にいたっても極端な未展開を示していたと思われる⁽³⁾。これらの点については、若干後に触れる)。これに対して農家率が極めて高く、かつ入寄留人の多い事実⁽⁴⁾は、この地域の後進的農村構造を端的に示しているといつてよい。

低位かつ不安定な生産力構造を支配基盤としながら、小藩の格式高い定府譜代大名たる松平氏の財政構造はまた、極めて基盤が弱く動揺度が高いという特質を必然的にもたらす。文化十一年の在所定収入総額五、六八九両のうち、七三%が在府・領国経営費、残る二七%が在所借財返済に充てられているし、前述のとおり、文政二年段階の在所借

財(先借分)額だけで定収入額を超過して六、三〇〇両余に達している。

年々の貢租・諸役金収入を大幅に上廻る財政支出を補填するものとしては、多額の臨時御用金(幕府軍役・不時支出等を名目とする)が登場して来る。享保二年の藩制成立以来幕末までの臨時御用金の全貌はもろろん把握できないが、ほぼ宝暦年間から金額・件数とも急増し⁽⁴⁾くことは否めない。御用金政策が藩財政の潰滅事態を辛うじて救って来たが、文政初年段階でついに在所先借金額のみで六千両を突破したことは先述のとおりで、文化末年に至り、その調達はいわば限界状況に達して来る。糸魚川町年寄「御用留」に始めて登場して来る、文化十一年三月「三御領収納米金大積書」は、こうした状況に対して藩当局が敢えて財政收支見積を提示して町・在の特権層に新しい協力姿勢確立を呼びかけたことを意味する。前月に才覚金調達を呼びかけていたためにも、具体的な返済計画を提示する必要があったから、返済見積額は江戸為登金・給人物成代金に続いて支出額の第二位に位置させなければならなかったのである。

言うまでもなく、最も強い臨時才覚金調達能力を持つものは先述の在・町方特権層であり、彼等が困窮している在・町方一般への賦課を肩代りする条件を持つことも当然である。それだけでなく、彼等の持つ信用・金融能力によって、領主入用はしばしば他領富農商からの借金も可能である。最も多いのは高田であるが、例えば、文化十三年九月、十一月に町年寄の名前をもって、三島郡片貝村佐藤佐平から七〇〇両、国田村善徳寺・神田町新田吉郎左衛門から計四〇〇両、池船村上原次郎右衛門から二〇〇両、頸城郡稲口村中村平左衛門から二三五両、石神新田磯貝三右衛門から六〇両等の急才覚金借用の事実も指摘することができる。⁽⁵⁾それは上越地方における一定の市場関係の成立と、そこでの糸魚川町とくに年寄・割元層の商業・金融活動の機能を想定せしめるものであろう。⁽⁶⁾そこでは米、および若干の農産物の糸魚川町への買付けと農村消費物資の販売を通じて、これら糸魚川町の特定商人と、農村市場を掌握す

第3表 池原家土地集積状況（「文化六歳正月 田地在高覚」）

	百姓数 (内他村)	買入石高	扨シ高	買入金高	買入銀高
神領蓮台寺村	13人(5)	石 9.5882	石 21.6100	両分朱 361.22	匁分厘 24.92
〃 片町村	3 (1)	2.8960	58.5000	40.	
殿領 寺 町	1	1.0150	2.000	22.	
〃 新屋町	1	1.7930	2.2500	16.3	
〃 七間町	1 (1)	3.3860	3.5000	29.2	
〃 横町西	17	29.1465	(記載ナシ)	53.32	
〃 〃 東	12	13.5109	(〃)	8.3	3.70
〃 上刼村	10 (8)	23.3936	29.4000	256.14	13.70
新 田 流 揚	3 (1)	3.2274	1.5000	26.1	
殿領 水崎村	3 (2)	9.1993	(記載ナシ)	5.3	
〃 平牛村	3 (3)	12.4579	14.8250	107.1	
〃 根小屋村	2 (2)	4.8333	8.9520	74.	
〃 中 村	1 (1)	0.7506	1.5810	14.	3.237
〃 別所村	1	1.4240	2.2500	15.	
根知谷五ヶ村 ※ (仲間分)		6.2468	11.5020	111.22	6.26
合 計	人 71(24)	石 122.8685	石 156.0700	両 1142.00	匁 51.817

※ 和泉・上沢・山寺・別所・蒲地五ヶ村。三仲間は、竹田・野本・池原。

る前記の農奴主的地主層との取引関係をめぐる結びつきが推定されるのである。

これら特権層による商業活動については他の論者によってふれられるはずであるが、ここでは若干彼等の実態に言及しておく。第1表①～⑮までの特権層のうち町方関係について判明する分を第1表に示した。持高は文政五年現在であるが、最高御用達池原家の四三石を筆頭に三〇～二〇石代が多く、酒造、廻船業、信州商売に従事していることが目立つ。この層の領内農村への関与の実態を、池原家について示したものが第3・4表である。

第4表 文政2年池原家の小作納米・小作人

(文政二「納米小作附控」)

田地	小作納米	百姓数	内 他 村 百 姓	同 計
五ヶ町村	石 95.884	42人	上荻4, 水崎3	17
根知村	12.539	11	大神堂2, 根小屋3 中村4	9
平牛村	14.375	10	押上6, 大和川2, 平牛1, 島1	10
〃仲間田地	15.675	4	押上2, 島2	4
神 領	52.4356	19	押上4, 蓮台寺10	14
早川谷	7.1042	5	藪1, 蓮台寺1	2
利 米	1.4375	3		
根知谷地 仲間田地	11.5020	9	上町屋3, 山寺3, 稲場2, 大神堂1	9
合 計	石 169.8448	102人	(14ヶ村)	65人

所持するにいたる。「仲間」は竹田・野本・池原三家を指すが、竹田は後の根知谷割元であり、野本は当時信州問屋であることからすれば、彼等「仲間」がなんらかの方法をもって現地農村との商業・金融関係を通じて土地集積を進めていることがうかがわれる。一方、文政五年「請印帳」によれば、これら特権層の多くが、多数の借家・借地人を抱える家主・地主として町方居住者を掌握していることも明らかである(例えば、小林与一郎は二〇人、奥泉が三人の地

これによると、文化六年現在、三町内と町場に近接する水崎・上荻・神領二カ村とともに、根知谷(大網通り)の根小屋・別所村や西海谷の平牛村などかなり遠距離や別谷の村にまで土地集積が進められている。同家所持高は先述のように文政五年四三石余であるが、この時期で土地の買入金高一、一四二両と銀五一匁余、買入石高は一二二石八斗余と所持高の三倍に達する。いうまでもなくこれらは質地集積によるものであり、後述のように多く直小作形態をとる質地小作地と推定される。文政二年には小作納米一七〇石に増加し、小作百姓も第3表の七一人から一〇二人に急増しており、集積対象は遠く早川谷に及んでいる。小作米が石高を上廻る高率であることも、この際重要な事実である(この点、後述)。なお注目すべきことは、両年ともに、根知谷に「仲間田地」を所持し、増加していることである。文政二年には平牛村にも

借人を支配する。後掲第7表参照）。糸魚川町方特権商人による、商業・金融関係を通じての地方・農村支配が、化政期にいたってかなり急速に進行していた事実の一端は右に見たとおりであるが、その背景にこの時期における小農民経営の一定の展開（＝農村の繁栄）を想定することが可能であろう。

しかしここで指摘せねばならないことは、右の特権層内部における新しい変化の動きである。糸魚川藩の地方統治機構は、町方にあつては町年寄（一―二名。世襲）を頂点に一町毎に町庄屋・組頭・町代が置かれている。その他町方から年頭挨拶に伺候するものに、信州問屋・諸職頭・錢座頭・船庄屋等があり、村方には村庄屋・組頭があつて領内全体では西浜各谷・下両郷・魚沼ごとに大肝煎すなわち割元および割元惣代が統轄・貢租賦課に當っている。他に町方には藩用達・同加談人が置かれている。これらのうち、藩権力機構に最も強く結びつくのは、いうまでもなく町年寄・割元・用達であろう。

文化十三年以降、藩の御用金賦課は九月に町方に一、五〇〇両（先の他領借りはこのためか）、一四年一二月には四〇〇両、一五年八月に五五〇両と急速に増大する⁷⁾。これらの負担内容については他の分析に譲るが、藩は調達円滑化のために十三年十二月に、八木藤右衛門・猪又八郎右衛門・同吉五郎・小山茂三郎の四人を才覚加談人に任命し、十一月には七間町子田六三郎（庄屋）・新田町松山禎四郎・鉄砲町竹田甚五右衛門の三人を、それぞれ根知谷の内横町・新屋町・七間町・大町・新田町・鉄砲町・寺嶋村・水崎村・上荊村・大野村、根知谷の内八カ村の支配を命じた（第1表参照⁸⁾）。

これら新才覚加談人・新惣代は、十五年八月、四〇〇両の内、町方・両年寄・池原と別に合計一〇〇両、文政元年に五〇〇両の内三〇〇両（十五年十一月、一、二〇〇両中新加談人四人で四〇〇両）等と独立して賦課対象に名を連ねて来ることからわかるように、明らかに新しい御用金調達能力を持つ層として把握されはじめたものといつてよい。

(実質負担額はこの際問題にしない)。

しかしこうした才覚金賦課も、全体として調達能力の一定の限界状況に来ていた特権層として、直ちに応じえたものではない。すなわち彼等は在所での藩当局者との再三の交渉を諦めて、年寄・割元・惣代代表七名が江戸出府によって解決しようとして、十五年九月に、駅問屋から願書が出ている宿場賃錢五割増要求も携えて出発する(これには松山察右衛門、子田六三郎も含まれている)⁽⁹⁾。しかしこの交渉は失敗した。在府当局者から「今度之御用之趣相分り不申」として事実上の交渉すら拒否されて帰国している。剩え、藩は不手際の郡代磯野治右衛門を解任して、黒川九郎治再勤を命ずるという強行策をとって来たのである。

新郡代黒川は十一月の着任早々、彼等にそれぞれ被下物を与え新任務申付、席次改、さらに扶持加増・苗字帯刀御免等の新特権を賦与し、同時に一、二〇〇両の調達を命じた。⁽¹⁰⁾ 注目すべきは、子田・松山・竹田の三名である。彼等は二年前に割元惣代に任命されて、いままた割元昇任・内用達加談・苗字帯刀御免等の責務と權威を賦与されている。こうした急速な特権獲得と権力機構への接近は、先に挙げた才覚金調達能力と無関係ではないはずであり、そこに、前述した、才覚金調達の、対農民(町方下層民も含めた)との関係に持つ特殊な意義と機能を設定するかぎり、当然ながら商業・高利貸資本としての新しい発展を考慮せざるをえない。この商業・高利貸資本としての急激な上昇という事実と権力への新たな接近とが相乗されたときに、その経済的支配への直接的抵抗がこれらの層に最も強く現出しやすいことも当然であろう。

文政五年現在、彼等の持高が一石またはそれ以下(第1表参照。子田は「請印帳」で確認できない)なのが騒動の結果によるものか断定できない。また彼等の急上昇を他の特権層との質的差異(例えば新しい市場関係への対応)に基づくものか否かいま判定できない。しかし、彼等が、同時に酒屋小松屋良八・善五左衛門ともども打毀し対象にな

っている事実や、割元として統轄していた根知谷農村よりも西浜村々が積極的であったことと考え合わせて、その商業・高利貸的側面がきわめて重要であることを指摘しておく必要がある。後述のように、彼等は化政期初段階の新しい地域市場の展開、中小農経営の一般的展開を、特権に結びつくことによって、上から掌握していかうとするものであって、その限りで一定の新しさを持ちながらも、却って流動する矛盾対抗関係の中に直接的に捲きこまれ打ちこわしの攻撃目標となったものということができる。

直接打ちこわしの対象から除外されたとはいえ、基本的性格は八木・両猪又・小山の新才覚加談人も同様と思われる。例えば、判明した限りでは、八郎右衛門は文政五年現在町方に二三石二斗を所持し、廻船を所持して信州商売に従事している（八木は二九名七斗、吉五郎は六石余）。この新割元・新加談人等は、ひとまず新特権層というかたちで把握しうるものである。彼等が町方や周辺農村部を商業・金融活動を通じて支配し、土地集積を進行させている特権層の中での、より急激に上昇しつつある新興商業資本であるときに、まさにその新しさの故に一方で権力と急速に接近せざるを得ないと同時に、他方では同時に上昇しつつある商業・高利貸資本との内部矛盾・対抗関係を拡大させていくであろう。急速な上昇と権力への接近という新たな側面が、さらに直接金融支配と高率小作料の収奪にさらされている農民にとって、当面の攻撃対象として選択されて来たことも従って当然の結果であったといわざるをえない。では、そうした新特権層と新興商人層および農民との間に生み出されている矛盾とは何であり、その背景は何か。次に、この検討をしておこう。

註

(1) 池原氏蔵享保二年「諸士列書」。なお同年の家臣総数は

九五名(内徒士一六名)、うち大坂詰一六名、江戸詰一八

名、在所詰一六名である。文化六年現在、知行総高一、

十九世紀初頭の町と村(鎌田)

七九〇石、扶持三〇人扶持、金一五三兩二分である(「系魚川町治革史」II)。

(2) 北島正元氏「越後山間地帯に於ける純粹封建制の構造」(史学雑誌五九の六)。西頸城地方の各谷蟠居の土家

十九世紀初頭の町と村(録田)

の系譜を引く有力百姓の存在については当面「西頸城郷土史料」参の「附録」が概略的把握に役立つ。

- (3) 例えば、高沢裕一氏「米作単作地帯の農業構造」(堀江英一編『幕末・維新の農業構造』所収)の指摘によれば明治十六年現在、西頸城郡は、小作地率三六%(一四郡中一二位)、小作人率四七・五%(同上)、田地率六一・四%(同上)、農家率八〇・四%(同五位)である(同書一二三頁)。

- (4) 前出「沿革史I」に「糸魚川松平家歴代御用金取立調」一覧が作成されており、大体の傾向を把握しうる。

- (5) 小林氏蔵「御用留」十三・九・二二、同十一・六条。

- (6) 糸魚川町が高田・今町とともに御料所石代相場書上をしていたことは、糸魚川の一定の米市場としての重要な位置を推定せしめる(『中頸城郡誌』第二巻、八五六頁、他)。

- (7) 前出「御用留」十三・九・二二、同十四・十一・二二同十二・一、同十五・八・七各条

- (8) 同右、十三・十一・八、同二六条。

- (9) 同右、十五・八・七条以下。

- (10) 同右、十五・十一・七条によれば、次のとおりである。

- 一、葵御紋帷子
- 一、御内用達兼帯
- 一、御内用達
- 一、割元兼帯

松山察右衛門
山崎只右衛門

割元上席被仰付候

- 一、右同
- 一、右同

閨屋徳左衛門
目黒十左衛門

- 一、一人扶持加増
- 一、御内用達
- 一、老人扶持加増

- 一、御内用達加増
- 一、割元
- 一、帯刀御免

- 一、御内用達加談
- 一、割元、式人扶持
- 一、苗字帯刀御免

- 一、右同断
- 一、右同断

竹田甚五右衛門
八木藤右衛門
猪又八郎右衛門
小山茂三郎
猪又吉五郎
御元次席
御目録
金貳百足宛

苗字御免
御目録
貳百足宛
関原徳十郎
下美守惣代兩人

右之通被仰付候上、猶又一同御座敷へ被召呼、御金用左之通被仰付之、

- 一、金八百両
- 一、金四百両
- 御内用達
- 新割元
- 新加談人
- 五人
- 三人
- 四人

四

明治初年の糸魚川町の「民業」について「糸魚川町地誌」⁽¹⁾の編者は次のように述べている。

古来ヨリ信州北安曇郡ノ線路ナルヲ以テ土地産物ノ魚類及ヒ他所他管内ヨリ輸入スル処ノ魚塩其他ノ物品ヲ以テ松本へ運送シ之ヲ業トスル者^{里俗之ヲ四}且之ニ關係從來シ活業ヲ計ル者^{十物師ト云}十二ニシテ殆六七分ニ居レリ、農ニシテ漁業ヲ兼ネ或ハ工ニシテ農ヲ兼タル者凡百戸、呉服太物其他ノ物品ヲ商業スルモノ凡三百戸、酒造営業六戸雑業凡五六十戸味噌醬油等ハ各戸ニ自料ヲ醸ス

これを明治三年についてみたものが第5表である。これらの事實は、ほぼ幕末期の傾向を反映するものと考えてよからう。すなわち町高一、二八〇石余、総戸数一、〇六九軒（内百姓四七三、水呑五九六（但し文久二年）の約六〇と七〇%が何らかのかたちで信州との交易に關与しており、農・漁・工兼營者一〇〇戸、呉服・太物等商業三〇〇戸、酒造六戸、雑業六〇戸が大体の生業構成であることがわかる。雑業六〇戸の具体的内容は不明であるが、糸魚川が高田・榑原・梶屋敷と青海の間にある北国街道の宿駅であることを併せ考えると、交通・運輸労働あるいは仲士稼などが多く含まれるものと推定できよう。⁽²⁾糸魚川町経済における信州商売の地位が高いことは明らかであるが、ここで町の展開について若干の検討を加えておこう（詳しくは鶴岡論文参照）。

享保十五年「大町明細帳」⁽³⁾によると、同町は二三一石余のうち二〇八石余が田高、畑高二八石、塩高一石余、家数一二一軒のうち六一軒本百姓、六〇軒水呑・店借という構成であり、うち酒屋四、商業一七であるがこのうち一軒は近在へ糶売商、七軒は近在へ嶋木綿類販売、四軒は能生町市場へ商売（塩類販売、疊筵仕入）、五軒は煙草・麻・大豆・小豆・米・干鰯・塩類他諸商で、諸職人は、紺屋六、桶屋三、大工二、木挽一、鍛冶三となっている。男稼の大部分は

第5表 明治3年糸魚川7ヶ町明細書上 (池原家文書明治三年六月「越後国頸城郡糸魚川各町明細書上帳」その他)

	石	高	家数	内水呑 (但、文久2)	伝馬※	浮役納 軒数(但、明治5)	※※ 納数(但、明治5)	生業
寺町	284.石		255軒	145軒	2	30 (4)		男塩浜稼、小回船、四十物稼、小商い。 女浜稼、賃仕事
大町	231.		192	116	2	22 (4)		同上
新屋町	77.		123	93	2	5.5(1)		男同上、日雇 女同上、冬は木綿織
七間町	110.		94	68	4	6.5(1)		男同上、駄賃取 女同上、
横町	533.		213	124	0	25.5(3)		同上
新田町	31.		124	36		13 (4)		男日手間取、越中信州等出商又は店小売 四十物渡世、女夏冬木綿織、日手間取
鉄砲町	9.		68	14	2	10.5(3)		男、諸職日手間取 女、夏冬木綿又は賃仕事、奉公

※ 農業用牛馬は在々の雇入

※※ ()内は半役軒数。内訳=氣船94、鍛冶4 (13)、捕鳥2、剃髪1、大工48、薪屋5、水車4、湯屋4、菓子13(13)。

田畑耕作(刈敷、腐糞・干鰯投入)。肥料農具代共約一七・一八両。獵師・請作(小作料上田一反一石四斗)。日用取で、女は木綿・細苧打賃稼等に当たる。これを、享保期における町方小生産者のほぼ平均的な再生産構造とみることが可能である。

みるとおり、町でありながらすべて百姓として高請しており、無高は水呑であってその百姓に対する比率はきわめて高い(後述)。しかし、諸営業の在り方からして村方と明瞭に違う特色を持っていることも明らかである。

さて糸魚川町の天和検地高一、二七八石余は、それ以前すでに町場として成立していた地域七ヶ町の総計であるが、この七ヶ町の戸口数の推移(第6表参照)を辿ると、明らかに化政～天保初期における町方の発展を察知しうる。しかも注目すべきことは水呑数の急増であり、町の発展が百姓経営数よりも水呑数の増大によって特徴づけられ

第6表—(2)
同人口数変遷

安永 5	4,425人
天明 7	3,989
寛政 3	3,992
文政 5	4,309
天保 9	4,285
安政 5	4,518
慶応 3	4,432

第6表—(1)
町方戸数変遷

元文 2	635戸
延享 3	845
安永 7	992(491)
享和 3	962
文化 7	1,007
文政 5	1,174(580)
天保 9	1,225
文久元	1,171(596)
明治 3	1,069(568)

註：()内は水呑戸数。資料は、池原家文書、
小林家文書、「沿革史」などによる。

ていると言つてよい。このことを念頭において、文政五年の町方の構成を
検討する(第7表—(1)・(2)参照)。

水呑は全体で四八%、最も多い町内で七三%、最少二〇%である。この
水呑のうち五〇%は地借、一一%は家借であるのに対して、史料の上で地
借・家借・町抱等のいずれにも属さないもの(記載のないもの)が三五%で
ある。その実体・性別は明らかにできない。

さて、糸魚川町は天和検地段階では、六カ町ともそれぞれ「町村」とし
て高付けされていて、後の新町は大町、新田と表記、寺町村は西海谷分とし
て扱われており、総石高の90%が田高と把握されていて、未だ「町村」の
ハ、ズな連合体としての性格が残っていたといえる(天和以前は町村名主
給田すら残っていた⁽⁵⁾)。享保十五年「人足調」⁽⁶⁾は、「八カ町より御陣屋御修

覆御小遣人足等御扶持被下置候」として一〇種類の人足役を掲げ、その理由として「八カ町之儀は古来々百姓地にて
地子御年貢相勤申候ニ付、御地頭様御代々御用人足扶持被下置候」として、町地は高結びされた年貢地であることを
指摘している。もちろん、この原則は藩制時代全時期を通して貫徹していたのである。

糸魚川の、一七世紀後期におけるこのような町としての景観的・質的未熟さがどの段階で基本的に克服されて行く
かは、今当面の課題として明らかにしえないが、各町村庄屋(名主)が比較的独自に領主―執行機関に結びつきなが
ら、次第に、いわば「運命的地縁の共同体」⁽⁷⁾としての町方を形成して行くと考えられる。いうまでもなくそれは農村
における生産力の発展によつてもたらされた社会的分業の展開と密接な関係にある。糸魚川町の成立を、右のように

第7表—(1) 文政5年の「百姓」と「水呑」

	百 姓 [㊤]	水 呑 [㊦]	掛 持 人 [㊣]	他村入作 [㊤]	㊤+㊦=㊣ [㊣] 合 計	$\frac{㊦}{㊣}$
寺 町	100人	119人	15㊣人	17人	219	54.3%
大 町	99	109	34㊣	6	208	52.4
新屋町	41	99	12㊤	7	140	70.7
七間町	28	77	17	18	105	73.3
横 町	161	111	38㊣	6	272	40.8
新田町	123	39	43㊤	17	162	24.0
鉄砲町	54	14	14	4	68	20.5
合 計	606	568	173㊣	75	1,174	48.4

十九世紀初頭の町と村(鎌田)

註：掛持人○内数字は七カ町以外の村の百姓

史料は(1)・(2)とも、池原家文書「文政五年請印帳」

第7表—(2) 文政5年の「水呑」の構成

	水 呑 [㊤]	地 借 [㊦]	家 借 [㊣]	町 抱 [㊤]	町 抱 [㊦]	町 抱 [㊣]	その他 [㊣]	門 前	店 借
寺 町	119人	41人	4人				74人		
大 町	109	96	13						
新屋町	99	25	3	9			61	1	
七間町	77	73	2	2					
横 町	111	43	7	1	4	1	55		
新田町	39	6	30						3
鉄砲町	14	6	8						
合 計	568	290	67	12	4	1	190	1	3

ほぼ天和検地以降、恐らく元禄期前後に見うるとすれば、それは享保年間にすでに糸魚川町から六ヶ市が消滅していたこと、および町方記録である「町年寄御用留」がこの時期に記録しはじめられることと無関係ではないであらう。

そこで先述の問題に立帰ってみると、高持Ⅱ百姓と無高Ⅱ水呑という封建的村落共同体の基本的構成要素に対応して、高持Ⅱ家持と無高Ⅱ家借・地借等が存在したと思われ、前者が町政に参加しかつ町方における酒造・旅籠等の諸營業株を所持し得た層であつて（仲間形成は具体的に明らかにしえない）、糸魚川における商業活動の中軸をなしたものと見える。すなわち、各町内（町村）にあつては村落共同体における身分的・経済的特権を、町方Ⅱ惣町としては都市共同体的構成と機能を持つていう二重の共同体がここでは原理的に成立しており、水呑層はこの二重の共同体Ⅱ共同社会から排除され差別される身分と地位を、原則的に強制されているのである。⁽⁸⁾

彼等がその再生産の基礎を、高持層所持地の零細小作、⁽⁹⁾ 浜稼・仲士稼、信州筋・北国街道の交通運輸労働、零細小商売等の不安定なものに置かざるを得なかつた事情は先述した。この階層が、近世糸魚川町における、いわば貧民・プロレタリアートの大宗をなすものである。しかし化政期段階にあつては、前項に触れた特権層（新特権層）の前期的支配の矛盾が、直接表面的なかたちでこの層に集中し、彼等が独自に反抗運動に蜂起するという意味での客観的・主体的条件が成立していたとはいえないであらう。

この点は、次節で見ると、領内農村部においてもほぼ同様であつたと見てよい。町方にあつても安永から文政期にかけて百姓の分解は徐々ながら進行していた（別掲鶴岡論文第18表参照）。化政期における「繁栄」事情は、第三節で、また本節の戸口増加状態によつて推定しうるところであるが、これを具体的に追求するためには、当段階における農業生産力の変化とそれによる中小農民経営の展開、全国的市場構造の変化に伴なう地域市場の成立を明らかにする必要がある。ここではその詳細な分析はできないので、当面重要な一、二の点を確認するに止めざるを得ない。

文化七年、北陸路にそつた糸魚川の隣宿青海村(高田藩領)から、糸魚川藩領と信州筋との二つの交易路(大網通と今井通)に設置されていた山口・虫川兩番所を通過せずに、同村が諸國產物引請けの上、橋立―小滝經由で信州へ荷物を通すという、いわゆる脇道(山下通)荷物附送り一件が発生した。⁽¹⁰⁾ 青海側による山下通開通・荷物附通しの件は、すでに明和年中に紛争化していたものであるが、信州問屋の幕府寺社奉行所への訴訟に發展し、二年間の吟味の後に、青海側の敗訴となった。しかし、青海側による周辺農村部の塩・海產物集荷と輸入荷物を含む山下道附通しは事實上跡を絶たず、十三年に紛争が再燃し長期化して来る。化政期における青海町の廻船基地としての發展は目ざましく、⁽¹¹⁾ 幕末には内川屋のように高田神原氏に一度に六、〇〇〇兩の貸金調達に応ずるような大廻船業者も登場して来る。⁽¹²⁾ それは当然青海を中心とする新しい市場圏の展開に結びつくであらうし、他方では糸魚川信州問屋の輸送独占に対する信州側(松本問屋)の反発と結合して新道Ⅱ山下通への要求はきわめて強いものになって来ていた。⁽¹³⁾

元来安永六年の信州問屋六軒の内三軒(株)の破産・廢止自体が、市場關係の變化を極めて象徴的に示しているといえるが、文化の訴訟事件以来独占の矛盾は急激に高まって来る。元来、信州問屋自体は塩専売權を持つ外には、自分荷物の仕入・荷受・販売機能は持たない、信州輸出入荷物改すなわち運上銀・⁽¹⁴⁾ 口錢取立てと輸送切手発行という權力機構の末端であるが、その権限は信州荷物に限定されず、関所・沖の口通過荷物はすべて彼等の統制支配に服さなければならぬ。⁽¹⁵⁾

化政期においては、その独占權に対して一方で他領市場町青海から、他方では領内から新たな抵抗が現われる。糸魚川が、在来のような遠隔地間商品流通の通過Ⅱ中継地であった段階から、周辺農村の一定の發展Ⅱ中小農經營の展開に支えられて領内市場の中心として發展して来る場合、この新しい市場に参加する階層にとって信州問屋の独占權が大きな障壁となつて来ることは必至である。

先の第1表に再び帰る。御用才覚金は、年寄・割元・加談人等の直接特権に連なる階層がこれまで事実上多額の調達を行なつて来たものであるが、化政期は彼等に対する、藩側の収奪が一定の限界に到達した時期であつたと推定される。文化年間ごろから在方・町方の特定の百姓が調達を指名される動きが目立つて来る。藩当局はここで新しい捕捉方法に踏み出していくのではあるまいか。

ここで前節で触れた、文化十五年九月の町年寄・割元・加談人等の出訴との明瞭な相違に気づく。今回の出訴には、いうまでもなく前年出訴者は一人も入っていない。そのことはどう理解できるか。出訴人四四人のうち五人は庄屋で、そのうち四人は村庄屋であつた。持高は確認しうるもののみについてみると最高八三石で、三〇石代二人、二〇石代四人、一〇石代一人であり、多くは、網船・廻船(請買船・小廻船も含む)を所持し、酒造・四十物師・信州商売・問屋・宿屋を営むなど、その経済的基盤と町方商人としての性格は、第二節においてふれた特権層よりも新特権層のそれとより近似性を持つものと言えよう。すでに前節で触れたことに関連して言えば、彼等が化政期において、百姓層の分解の中にあつて次第に中小農経営の発展に伴なう農村市場の発展に対応してそれへの商業・金融支配を強化しえた階層であり、それを背景にした廻船業・信州商売に進出しうる条件を持っていた階層である。⁽¹⁶⁾

彼等が越訴において他の条項は強く執着せず最後まで庭銀増取立てにのみ強硬に反対し続けた背景には、農村の「繁栄」に支えられたこれら有力な百姓層にとつて、信州問屋の統制と特権は発展の隘路になりこそすれ同調しうる余地のないものであつた事実が存在したと考えられる。さらに他方で、過般来の調達命令は、町年寄・割元・加談人等特権層の藩権力への寄生による領民収奪の疑い極めて濃いものであつた。越訴勢力の特質は、こうして、彼等のうちとくに指導層の基本的性格が前記特権層と同質のものでありながら、展開する中小農民経営により直接的に関与し、新しい農村市場により自由な商業・金融活動を通じて進出しようとする有力農民であり、その限りで、特権的支

配・統制と権力への寄生に強く抵抗する必然性があったといつてよからう。

註

(1) 池原文書「糸魚川町地誌」。

(2) 町場続きの上荊村では、「川除け普請人足賃稼、四十物荷物を以日雇賃稼」(糸魚川市上荊地区区有文書、明治三年「上荊村書上帳」を農間稼としている)。

(3) 池原文書、享保十五年「越後国頸城郡根知谷大明町細指出帳」。

(4) 『中頸城郡誌』第二巻、一、三六四頁「明細帳」。

(5) 「糸魚川町史稿」第三、分類史前巻一、〇七三頁。

(6) 「糸魚川町史稿」第三、編年史。

(7) 中井信彦『幕藩社会と商品流通』(塙書房 一九六一年)第一章第三節。九三頁。

(8) もちろん、町場、とくに宿場町等のこうした二重性格は糸魚川町特有のものではない。その生産構造・社会結合・統治機構に占める役割などの複雑な関係は、最近丸山雍成氏のすぐれた研究(『産業史』上・下巻、一九六七年)で具体的に分析されている。

(9) 前節文政二年池原文の町方居住小作人三七のうち、同五年「請印帳」で判明した一七八中一四人が高持、三人が水呑である。同家の史料に限って見れば、高持よりも水呑で大きい小作地を耕作する例もある。

(10) 前掲『青海—その生活と発展—』四六五頁以降。その

他、この件については小林家文書「御用留」、御風文書「差上一札」等参照。

(11) 同右 四三三頁以降。

(12) 糸魚川市梶屋敷、斉藤幸蔵氏蔵、嘉永六年「借用証文」。糸魚川町においても、天保十四年より三カ年間、横町庄三郎外四名が、所持高四三〇石余(四、一五〇町)を抵当として御料廻米引請に当っている例がみえる(池原文書「御用留」所収、天保十四年三月「御廻米直引請証堀田畑屋敷証文之事」)。

(13) 山家克己「糸魚川街道の塩輸送について」(歴史地理六六の四・五)。なお、山下道運輸の事は文政以降幕末まで完全に停止されなかったと推定される。明治二年信州問屋・四十物年番惣代・八カ町庄屋からそれぞれ輸送停止の願書が出されている。(池原文書「御用留」拾四番)

(14) 運上銀は信州問屋から、その十分一を町年寄に、他を町年寄を通して上納する。文化十一年「大積」金納では三五〇両で、三分一金納九七五両に次ぐ。藩財政の重要な財源の一つであったこと斯くの如くである。

(15) 御風文書「信州問屋職仕来覚書写」

(16) 第1表、源右衛門・伊右衛門の例を見よ。文政から天保にかけて、急激な膨脹があったことが知られる。

五

越訴と並んで騒動の他の一つの内容をなす町方打ちこわしの組織と行動内容は、現段階ではあまり具体的に追求できない。

しかし八月二八日の調達金割当決定以来翌日からの一宮社殿での引受人会合、九月二日の町在六二軒大戸への張紙、同五日の四四人出訴に至る行動の迅速さと、翌六日の羽生・村山山中の集合、一三日の破壊行動などの一連の動きの中から、二つの行動がきわめて計画され組織されたものであったことは否定できない。「(出訴)留守中異変は惣百姓申合置仕方也可在之」といい、「中々一朝一夕之企てにてはなし、いかさま天狗の所為といふも尤もなり」という大野村の「記録留」・「御用留」の指摘は暗に指導部の存在と両者の関連を示している。十六日の藩目付宛「歎願書」には三七ヵ町村の村(町)役人が署名しており、庄屋が出訴している村は庄屋代がこれに当るなど、出訴と打ちこわし―歎願の二つの行動の結びつきを示しているが、同時にこのうち山口・上荏・田海・寺嶋・押上・竹力花各村と七カ町のように調達金引受人―出訴者を出した村はわずかであり、打ちこわし―歎願がほぼ西浜村々一円―全領的規模で組織され行動したものであることを示している。打ちこわしと出訴の間に一定のズレがあり、前者が後者を越える激しいものになった事情が当然考えられねばならない(出訴者が打ちこわしについては関知しないと述べていることとは別に、この客観的事情が検討される必要がある)。

十六日の歎願書の内容は第二節註(6)に示したとおりである。それは、(一)冥加米撤廃、(二)丑年見越金・月割滞金・在所借金の全面返還、(三)月割上納金の割合一定、(四)先納金の旧例復帰、(五)他領よりも高い石代相場引下げ、⁽¹⁾とならんで、(六)江戸借金返済に際しての用達(特権層)の高利貸的寄生排除を強く要求している。この歎願書は破壊行為

終焉後に、闘争の要求の諸側面を凝集して表現したものであるが、郡代打ちこわしに際してのスローガンはさらに激越なかたちで表現されている。⁽²⁾

仔細に検討すると、このスローガンは明きらかに広汎な町方住民Ⅱ中貧農・水呑層を含む諸階層の諸要求であつて、十三日の打ちこわしが松山三家と郡代攻撃であつたことと併せ考えると、破壊活動そのものの口火は町方住民によつて切られたものであり、翌十四日に人数も二倍に増加して新割元三名が打ちこわされている。これは在方人数の参加を物語るだろう。このように騒動の総過程には、越訴―町方住民の打ちこわし―在方参加による打ちこわし拡大という、いくつかのアクセントが置かれていることがわかる。黒白騒動は、この三つの性格―越訴・町方住民打ちこわし・全領民による町方打ちこわし―を同時に内包した複雑な構成を持つものであつた。前二者については既に一応触れて来たので、ここでは村方の打ちこわし参加への背景を若干検討しておこう。

まず、一揆の集合が最初に持たれた西海谷の溪口に展開し北国街道筋に位置して、田海等川西勢と共に一揆不参加の根知谷村攻撃に最も積極的であつた大和川村とその周辺農村をとりあげる。この地帯は水田地帯ではあるが、塩高(塩場・塩屋)があつて製塩を行なっており、無高者を含めて「御納所并家内諸入用共浮舟方々仕入」れて海獵渡世に従事している半農半漁地帯である。小高の者は多く「田畑請作并作方之日用取」に従事する。塩浜稼については、「三月〇八月下旬頃迄、糸魚川町信州問屋方々浜道具入用并給物等買調候、代物借出し浜かせき仕候」とあつて、完全に塩州問屋の前期的前貸支配の下で生産されている。⁽³⁾

田伏村は村高一二一石余、慶応二年七八軒・四二二人、明治三年一〇八軒・五五七人の小村であるが、この村の寛政九年と万延元年の持高構成を示したものが第8表である。一石以下の零細農民が圧倒的に多く、寛政九年現在、天和検地で高持であつたものが「無高」(記入なきものも含む)になっている事実が注目され、分解は寛政以降に下降

第8表 田伏村持高構成

	寛政9年	万延元年
5石~10石	4人	6人
1 ~ 5	41	34
1斗~1石	48	45
1斗以下	17	40
無 高	30	23
計	140	148

註：田伏区有文書，寛政9年「田伏村銘々持石高帳」(天明6年のものの写し)，万延元年「惣百姓銘々持高帳」による。

第9表 慶応2年
押上村持高構成

62石	1人
15 ~ 20	1
1 ~ 5	16
1斗~1石	58
1斗以下	9
計	85

註：押上区有文書，慶応2年「高人別改帳」による。

第10表 大和川村持高構成

	天保5	嘉永2	安政6	明治2	明治11
40石以上			1		
30 以上	1人	1		1	1
25 ~ 30					
20 ~ 25	2	2	2	2	2
15 ~ 20	2	1	1	1	1
10 ~ 15	6	7	6	5	6
5 ~ 10	20	14	12	16	17
1 ~ 5	50	57	56	53	54
1石以下	60	62	67	71	66
1斗以下	38	38	38	36	40
合 計	179	182	183	185	187

註：本表では，他村からの入作人は除外した。(大和川区有文書「天保五甲午極月書写 大和川小前高帳」により作成)。

的分解を辿って、とくに一斗以下の増加が目立つ。出訴の庄屋折右衛門はこの中でわずかに上昇していく層に属する。慶応二年の押上村では幕末期の特徵的事実を指摘できる(第9表参照)。ここでは、六二石の出訴者又右衛門が飛び抜けて大きく、一一石以下が五八人と高持の六八%を占める(同村は村高三二二石九斗余、享保年間九四軒のう

ち本家七五軒、水呑九軒)。

次に大和川村についてみよう。同村は、天和三年「明細帳」によれば、高四七一石一斗余、内山高四石九斗、塩高一二石余である。⁽⁵⁾第10表は天保五年以降の村内持高構成の変遷を示したものである。同村の生産諸条件も先述のとおりであるが、安永七年村内次兵衛が高田領鬼伏村彦兵衛に二年間にわたる米「売附金之内」三〇両を貸して八幡丸(二五〇石積)を抵当にとっている事実は、⁽⁶⁾この地域における米生産量の増加とこれを商米として掌握する有力農民の営業規模の大きさを推定させるに充分である。街道筋村々の有力農民による、後背地谷々の掌握が一般的な展開はこの時期の各地の事例にみることができる。⁽⁷⁾

しかし第10表で明らかのように、天保以降にあっても分解速度はきわめて緩慢であって、とくに10%弱の10石以上所持者の地位は不動で、10石前後の中農層、五斗以下の極小農の変動も目立つものはない。しかしその内部での質地異動は決して少なくない。第11表は、文化九年から文政四年までの一〇年間と、文政九年から慶応二年までの二期に分けて大和川村における質地異動状況を示したものである。

面積が不明なので石高移動に頼らざるを得ない制約はあるが、化政期と幕末期(便宜上文政九年以降を指す)を比較すると、全体として移動件数・質置人・質取人はそれぞれ後者は前者の二〇%、三〇%、四七%といずれも増加していて、少なくともこの面に関するかぎり、化政期が一つの画期をなしていることを指摘できる。一方質地移動一件当り価額は前者で約四両二分、後者で約六両一分と四〇%の高騰であるが、石当り価額は低下している。この理由は今明らかにできないが、田地のみについてみてもこの傾向はほぼ同様である。勿論移動石高は天和検地の一筆当りの高であるから、現実の生産高はこれに数倍するとみるのは当然である(より詳細には打米高で検討すべきであるが、ここでは一応の傾向を知るに充分である)。寛政七年の隣接村梶屋敷村(高田領)の記録では、⁽⁸⁾質地価格は一反歩(田)

第11表—(1) 大和川村質地移動

	文化9	"10	"11	"12	"13	"14	文政元	"2	"3	"4	平均
A. 移動件数	11	54	25	21	4	15	18	21	22	3	19.4
B. 質置人	9	24	16	18	3	12	11	9	10	3	11.5
C. 質取人	9	36	20	16	4	13	12	16	14	3	14.3
D. 移動石高	1石990	16.322	3.579	2.019	1.431	2.810	3.061	2.723	1.630	2.367	
E. 移動金額	{ 35. 両1分0.5切	289.22	136.30	61.02	28.00	42.30	33.23	54.30	84.12	32.30	
F. 一件当り金額	3. 両1	5.3	2.00	1.5	200文	3.0	22.27	1.0	1.0		
G. 一石当り金額	17. 両3	18.0	5.2	3.0	7.0	3.0	1.3	2.2	4.0	10.1	4両2分
			38.0	30.0	19.2	15.0	11.0	20.0	51.0	13.3	23両2分

第11表—(2) 大和川村質地移動

	文政9	天保2	"7	"12	弘化3	嘉永4	安政3	文久1	慶応2	平均
a. 移動件数	10	25	64	22	41	10	10	22	20	25
b. 質置人	9	15	32	15	19	7	10	17	15	15
c. 質取人	10	24	51	15	27	9	8	14	16	20
d. 移動石高	3石300	4.615	20.255	7.240	19.523	10.441	4.928	6.543	4.331	
e. 移動金額	{ 56. 両31 15匁00	69.12	345.12	139.22	252.13	135.32	62.10	106.31	132.13	
f. 一件当り金額	5.2	2.3	5.2	6.1	6.1	13.2	6.1	5.0	6.2	6両1分
g. 一石当り金額	17.0	15.0	17.1	19.1	13.0	13.0	12.2	16.0	30.0	17両0分

註：史料は、大和川区有文書「年々小前高切遺帳」（全三冊）（文化9～明治12）による。

永一貫七〇〇文、一貫文、畑四〇〇文、一五〇文だから、かりに反当一石として一兩に満たない。

この書上数値がもちろん作爲的なものであり、移動石高が現実生産高の数倍に達することを考慮してもなお、寛政以降化政期にかけて質地価額は高騰しつつあり、そのことはこの時期における農村の「繁栄」を一般的に表わしているものと言つてよからう。

さて、「田畑切遣帳」記載内容の重要な特色をいくつか指摘しておこう。年季は圧倒的に二年季が多く、年季更新も多いがその場合も二年が多いし、入質時期は年末に集中している。また一件当りの移動石高・金額も極小であるが、時に最高一筆の四八分の一等の分割入質（これは現実の土地移動すら予想しないものである）がきわめて多い。また書直しはあつても「請返」「切返」や「質流」は文化九年から明治十年代までの間に十数例発見されるのみである。

これらの諸事実は次のことを意味する。すなわちこの質地移動の性格は主として年貢納入手段として行なわれるものであると同時に、請返しや質流れが原則として予定されてないものであること、これである。入質価額の高さの真の意味はそれであり、そこから当然に質地小作の問題と小作料の一般的な高さが問題になつて来るであらう。

「切遣帳」でみる限り、質地には原則として質地直小作關係が成立しているといえる。証文に「但し年々小作可致定メ、違作之節者村方御法之通急度可相納云々」とあるのはそれを示す。苗山を除いて、年貢・諸役負担は質取主に扨米(9)小作料と一括納入される。扨米が石高を上廻ることはすでに各地の例で指摘されているとおりであり、大和川村においても一・五〜二倍程度が最も多く、幕末期には石高の七倍〜二〇倍という扨米が目立って来る。幕末期における、このような高率小作料の展開はきわめて重要な意味を持つであらう。名田小作を基本とする頸城郡が、越後山間部にあつても格別に小作料が高いという特質は周知のところであるが、まさに扨米高の増加率に示されるような生産力の發達は、化政期以降幕末期にかけてこれを推定してもよいであらう。(10)

以上要するに、化政期における中小農経営の一般的展開は想定しうるにもかかわらず、顕著な持高移動は見られず、階層分解は質地地主―小作関係の展開として村落内部において再生産されて来ており、一部上層高持層のいわゆる「農奴主的地主」経営は、動揺しつつも基本的に崩壊する条件を持つことなしに村落の経済的・社会的支配を継続しているといえる。この時期における上層高持層の商業・金融支配も、この基本的関係の上で展開されるものであろう。

このような状況の上に、先述した信州問屋の、塩専売制下における前期的支配に示される糸魚川町特権商人の支配が覆いかぶさって来ている場合、割元を勤めた大和川村岩崎七右衛門やみのや甚右衛門（いずれも、「農村商人」を兼ねる）、押上村又右衛門（六二石）、大和川村甚四郎（庄屋、天保五年三一石余）、甚九郎（同二〇石七斗）等の直接農村市場を掌握している上層農や、金五右衛門（同一石七斗）、源十郎（同四石）等の中層の抵抗は勿論、経済的支配をうけている村内農民の攻撃対象が、まず町方特権商人に向けられていくことは当然であろう。その内部に激しい質地地主―小作関係の展開をはらみながら、この段階における矛盾の表現はそのようなたちで現わされて来ると考えられる。

しかし、同時に甚四郎・甚九郎等の天保以降における順調な発展に対する、岩崎・みのや等の急激な地位の変化（註(11)参照）の事実が示すように、化政期は村落内部にあっても大きな矛盾をはらみながら進行していた時期であることは否定できない。明治二年のいわゆる賈金騒動において町方十九軒とならんで、大和川・田伏・山口・山寺その他五カ村の豪農が激しい打ちこわしをうけた事実⁽¹²⁾は、幕末期における新しい矛盾の展開を物語っている。

化政期農村社会の矛盾の表われ方を、根知谷大野村についてみる。同村は信州街通（大網通）に接し、天明元年現在村高六九六石五斗（但し、内天和検地高三六〇石余、他は新田。田高六〇〇石余）、家数一七六軒（百姓）、牛馬を一五〇（内牛四一疋カ）疋所持する。明治三年は、家数二〇九軒と僅かに増加している⁽¹³⁾。西浜村々に比較して牛馬が多いことが、村民の信州荷物輸送労働への従事と直ちに結びつくか断定できないが、幕末には百姓作間に「信州背負荷」⁽¹⁴⁾稼があっ

第12表 天明7年大野村持高構成

	百姓数	抱水呑数
35石~40石	2戸	7
15~20	4	10
10~14	13	13
5~9	23	9
1~4	59	27
1以下	8	
計	109戸	66戸

註：糸魚川市大野中継所蔵。天明七年「未五人組内改帳」による。

て、西浜通村々よりも、牧荷(ぼっか)等による信州との商品輸送―流通に關与する度合が深かったことは否定できない。文化十四年に同村徳左衛門が糸魚川町及び田海村の独占に対して酒造願を出している⁽¹⁵⁾のも、街道交通の發達と無關係ではあるまい。

第12表では、天明年間に四石以下が全体の六〇%以上を占め、水呑が総戸数の三八%弱に當たる(抱水呑とは「―支配」と記載されているものを示す)。この時期に、すでに零細農・水呑による農業の生産条件確保のための運動が領内農村で広汎に發生していたことは注目すべきである。

ある。

於村々小前之者共惡作を申立いたし、差たる難儀に無之者迄申合、其村庄屋共江無筋之願申出候由粗相關候、其上他村江入小作之分并耕作ニ付候儀は、何に不限申合候而、不埒成義申掛候由⁽¹⁶⁾

ここでは、領主収奪に対する、小生産者の一定度の持続的・組織的な抵抗の動きが芽生えていることを察知できよう。天明六年の、根知谷八カ村の月割金三〇〇両(根知八カ村分。一五〇両ともいう)割当反対一揆は、庄屋以下一五才から六〇才の男子残らず、「町方諸役懸り御上と密談之上と察し」て割元歌川を糸魚川町に攻撃した事件である。事件は根知谷全部で二九人、大野村のみで十八人の入牢、数カ村の組頭手鎖、御頼金・雑用金差上、首謀者所払などの処分を受けて農民側の全面的敗北に終った。⁽¹⁷⁾この根知谷騒動の後、大野村では寛政から化政期にかけて村方騒動が相次いで發生する。第13表は、糸魚川町およびその周辺部に發生した騒擾を十八世紀後半以後についてみたものである。ここでは大野村を中心に見ているが、化政期以降の村方騒動の趨勢をつかみえよう。

第13表 糸魚川周辺騒擾年表

年次	事 項
安永9	○沖ノ口役銀騒動(越訴・うちこわし)
天明元	△上荊村小百姓神宮寺へ押掛
天明6	根知谷月割金騒動(割元へ押掛)
寛政7	△庄屋勘定不正糾弾騒動(庄屋退役)
文化5	今井谷5ヶ村(200人)庄屋不正糾弾(強訴)
文化6	△庄屋不正糾弾(庄屋田地取上げ)
7	△国役金取立不正一件騒動(訴訟)
13	△庄屋不正一件騒動
文化14	田沼領早川谷村々騒動
文政2	黒良騒動
"	早川谷騒動(打ちこわし)
文政5	西浜村々改革一件騒動(財政改革要求)
天保7	△小作料軽減要求(不穩)
天保8	上荊村村方騒動
嘉永4	○小前層米安売要求(不穩)
慶応元	○小前層米買占反対(不穩)
2	○"米安売要求(不穩)
明治2	二分金騒動(うちこわし)

註：○……町方，△……大野村

販売不明金の弁償として村方で田地三〇〇荊(六石六斗五升余)を没収したことに對する上訴等が重なつて爆発したものである。⁽¹⁹⁾ 退役した三郎兵衛等村役人に對する村民の追及は七・八両年まで続けられ、結局不正が発覺して、追及の中心になった三名の百姓三人共に過料金を課されているし、文化十三年には下村庄屋与兵衛の勘定不正が問題になり内済になつて⁽²¹⁾いる。

寛政以降に發生した右の一連の村方騒動の意味は、次のように考えられよう。西頸城地方の各谷に蟠居した農奴主

寛政七年二月には、庄屋仙右衛門に年貢勘定に不正あり、として四三人の百姓が抗議し、結局親類十二人が請合つて仙右衛門退役と押込米返済を条件に妥協が成立している。⁽¹⁸⁾ 文化に入ると、六年から十三年の間に騒動は集中している。六年四月には、寛政十一年以来の庄屋保坂三郎兵衛外五人の村役人に同三年以来三カ年間の御用金の年賦返還金・同利息・諸賄雑用過銀計五両二歩と一匁七分の不正があつて惣百姓から追及され、結局返還して内済にした。しかしその背景は深く、三郎兵衛は「強勢を以大小之者を掠め不当之割方多く」、公費の着服、国役普請費用一二〇両立替金不明の事実、村中梓木

的地主」層の一人に数えられる保坂(とその同族の上層農)の伝統的な支配的地位は、化政期に至って、自らの生産諸条件を守るために領主収奪に対して連帯して組織的な行動を起しうるほどの展開を遂げつつあった小生産者層の抵抗によって明らかに動揺しはじめている。文化六・七年の非曲攻撃対象になった層に対して、追及の主導権をとったのは三石・一石の前記零細農であり、代わって選ばれた庄屋が四年後に再び攻撃され退役するなど小農の成長を背景にした変動は激しく特徴的であるが、村政掌握権がつねに、全体としては上層農民に結果していることも否定できない(例えば、弥兵衛は一二石、金右衛門は三五石、勘之丞九石等)。小農の力がこのようなたちでしか結果しない村方騒動が、まさにそこでの村落構造の在り方を示している。

しかしもちろん、この化政期における村方騒動の意味を単に低く評価するのみでは不十分であろう。恐らく、それは先述の西浜海岸村々についてみた質地地主——小作の分解現象と照応するものと考えられるし、西浜海岸村々においてもほぼ似た村方騒動が、続発していたと推定される(この点は現段階では史料制約で明らかにできない)。

従って大野村及び根知谷勢の打ちこわし不参加も、直ちに右地域の構造的差異に結びつけられないであろう。同地域が糸魚川町特権商人による前期的支配——土地集積の対象にされていたことは既述のとおりであり、御用金賦課に対して彼等の権力との結託(『高利貸的寄生』を鋭く指摘していたのも大野村であり、いわんや直接的には根知谷一田の割元が松山・子田・竹田であったことを考えると、町方攻撃の理由と条件に必ずしも欠けていない)。

前出の大野村「記録留」は、打ちこわし出発の直前になって、村庄屋・組頭の主立が天明六年の敗北を例に引いて「先ッ可成丈者控居、外村ニ洩候而も後難之無之様……何れ外村之跡ニ付、宜敷に随ふ外なし」と一揆勢引止めに当っていることを記している。糸魚川町・在の寺院との協議によって出発が遅らされ、町方・西浜村々よりの大野村打ちこわしの動きが伝えられて急拠上菊村まで出動したものである。この一揆参加への立遅れの意味は、なお今後

検討の余地を残しているであろう。

註

(1) 鶴岡論文参照。なお史料館蔵「祭漁洞文庫旧蔵水産史料」所収「押上村大瀬家文書写」(寛文六・享和元)の押上村享保年間の「願書」は、三分一金納値段が相給の御預地で10両に付55俵、神領で48俵7分5厘に対して糸魚川藩のみ37俵という高値で、願金納は33俵半である不当性についている。この事態は、中期以降も変わらなかった。

(2) 第二節註(4)参照。

(3) 史料館蔵「水産史料」所収前出史料および糸魚川市押上地区区有文書、享保十五年「村差出明細帳」、同田伏地区区有文書、天和三年「検地水帳」等による。塩高は、田伏六石七五一、二町六畝十六歩、押上は二三石余。

(4) 田伏地区区有文書、慶応二年「宗門人別改下帳」、同明治三年「田伏村明細書上帳」。

(5) 『中頸城郡誌』第二卷、一二八三頁。

(6) 史料館蔵「水産史料」所収、大和川村文書「鬼伏村彦兵衛船賃入借金証文」。

(7) 糸魚川市梶屋敷地区永越尚氏からの聴取による。同家は幕末期に自ら廻船を所持し、また糸魚川の廻船業者と提携して奥地谷々からの農産物(米・麻・煙草)等の買

付けに当たったという。

(8) 「糸魚川町史稿」所収「明細帳」。

(9) とりあえずは前掲「青海―その生活と発展―」紹介の上路・今村・田海・青海各村の例参照。

(10) 前掲北島論文、三〇―三一頁。

(11) 幕末期についてふれておく。年季は二年季が基本であるが、無年季とともに、四、十年季が多く現われはじめる。石高と秬米との差は大きくなり、一件当り規模が一二〇両、十石五斗九一両、九石二斗八九両と多額のものが見えはじめる。これは、明らかに年貢納入目的ではない。ほぼ嘉永―安政期に変化が著しい。岩崎・みのや等の大高持の急速な没落もこの時期であり、開港前後における「農奴主的地主」経営の解体を暗示すると思われるが、分析は後日に譲る。

(12) 池原家文書「二分贖金騒動日誌」、同「毀方ニ付紛失物取調控」。

(13) 大野中継所文書「天明元年越後国頸城郡根知谷大野村指出帳控」、同明治三年「大野村書上帳」。

(14) 同右「書上帳」。なお「糸魚川町史稿」所収、安永九年「大野村方御尋ニ付御答書」、天明「指出帳控」では、「か

りほし芝其外青もの等を糸魚川へ持出し渡世仕候、女子は作間の間に卒はた仕候」とのみあるから、この限りでも幕末の変化を察知しうる。

- (15) 大野中継所文書、文化十四年「酒造願却下書類」。徳左衛門は天明七年現在所持高三八石で村内最高、水呑四人を抱える。勿論この願書は却下された。

- (16) 同右、「従天明元辛歳至同八戌年記録留」

- (17) 同右、「自元禄九年至天保四年記録留」、同「村方一味連判之事」による。

- (18) 同右、「勘定出入一件ニ付指出申一札」。

- (19) 同右、「内済証文之事」。

- (20) 同右、文化八年「勘定不正ニ付申渡覚」。

- (21) 同右、「内済証文之事」(与兵衛、下村惣名代弥兵衛、
〆両村宛)。

六

黒白騒動が結末を告げてから三年後の文政五年五月、藩当局は借財処理について領内に意見を問うとともに「二、〇〇〇両の御頼金を命じて来た。七カ年冥加代金をもって返済、⁽¹⁾「以来決而御用金御頼金等被仰出間敷」という一札を小林与一郎以下町方十三人と領内出金の者一同に差出しての命令であった。

これに対して西浜村々代表は、糸魚川真常寺に会合して一四カ条の財政改革案を出した。⁽²⁾前掲『青海』(一五〇頁、一六〇頁)の要約を掲げておこう。

- (1) 藩の財政を町年寄・割元・加談人に任せること。
- (2) 殿様御供・新古夫人・安永以後の召抱人を減ずること。
- (3) 山口・虫川関所役人を一人に減すること。
- (4) 江戸為登金飛脚廃止。庄屋順番制確立。
- (5) 浜御番所を年寄に預けること。
- (6) 在所の代官以下をすべて江戸詰とすること。
- (7) 家中衆の扶持を減らさぬこと(不正防止のため)。

この、在地による領主賄を前提にした思い切った改革案提出は、一万三千石大名松平氏の財政の質的転換、ひいては藩権力そのものの変質を意味する重要な事件であった。

果たして藩は、「御政治向に相拘」わるものとして田海村庄屋助六等四人を江戸に召喚して真相を究明している。この事件の追求はいま避けざるをえないが、この事件には町年寄・割元は関与していなかった。二年の出訴に比較して、ここでは庄屋以下の農民たちの極立った進歩があるといえよう。彼等は、独自に藩政改革案を提示して行ったのであり、その行動の前提・背景が三年以前の出訴と密接な関連をもつことも当然である。

最後に、黒白騒動について確認しえたことを、ほぼ次のように要約しておく。

それ自体不安定な領主財政の構造を象徴する御用金政策が、一定の限界点に到達していた化政期に、独自に領主の新たな収奪対象となつて来た農村における、上層農民の性格は次のようなものであった。彼等は「農奴的主地主」の系譜を引きながらも、この時期の一般的「繁榮」の中で展開しはじめる中小農経営の新たな掌握のために自ら農村商人として(販売と買付の過程を通じて)、農民と町方特権商人双方と対立する。村方騒動における激しい農民の突き上げや、酒造株や塩の生産・流通独占をめぐる町方との対立はそれを示す。町方商人の経済的独占、とくに町方新興商人の上昇とその権力への接近(当面、御用金政策に寄生する特権的高利貸機能)が相乗されたときに、いわばその分け前をめぐる決定的対立がそこに醸成された。騒動の一つの内容をなす越訴の背景はそうである。

「農奴主的地主」のなお残存する伝統的支配、高率貢租(石代値段の高さ)、町方商人の前期的・特権的な生産・流通と金融支配の過程を通じての土地集積の進行、全体として越後農村で最も高い(従つて全国的にも最高の部類に属する)小作料等の諸条件は、副業的商品生産の未発達下にあつて、中小農層の経営存続・拡大を阻止して行く。村落内部には激しい階層分化移が現実に行進しながら、それが直ちに持高移動Ⅱ経営変化となつて表われず、証文書替えによる質地動を急速に行進させて、この過程での上層農および町方商人による金融支配が強化され、質地地主—小作関係を全般的に再生産しながら事態は進行して行く(再生産維持のための中小農層の日常的抵抗は村方騒動として展開するが、

それ自体は既存の村落支配体制を動揺させても、直ちに崩壊させる力になりえない。打ちこわしにおける、町方・村方の組織的蜂起の客観的条件はそう考えられる。

町方・村方の無高・貧民層の数自体はきわめて多いが、彼等が自ら蜂起自体の中心勢力になって行った形跡は、今のところみられない。化政期段階の基本的な矛盾は、都市うちこわしの要素を含みながらも、諸階層の要求が村方の町方攻撃というかたちで表現されるような特質を持っていたのだといえる。もちろんそのような把握の仕方だけで、この時期の町と村の關係、全般的な社会・経済的な諸關係を充分には認識しえないだろう。

糸魚川の騒動が鎮圧された直後の九月二七日に、幕領・田沼領・糸魚川領が入組んでいる早川谷の村々で発生した小百姓の蜂起(第二節参照)は、明らかに黒貝騒動の影響を受けた、それと一連の事件であった。上出・下出両村は糸魚川領の相給村である。田沼領村々は黒貝騒動の二年前の文化十四年に一揆(打ちこわし)が発生し、これが一時的に急速に広がっていた。⁽³⁾同種の事件が発生しうる客観的要素が西浜の糸魚川領村々にも一般的に伏在していたことはすでに述べたとおりである。

天保期に入ると、確かに新しい問題が発生して来る。藩役所が自ら、

当春中々時候不順ニ而作方取実相分候ニ付、小作之者共申合、田主江不当之引方申立候村方茂有之候趣相聞、不埒之事ニ候、尤格別取実無之場所ハ苅取前内見請、相当之引方勘弁請候義者勿論ニ可有之筈之処、無其儀も大勢申合事⁽⁴⁾(下略)

と小作人の徒党を禁止し、地主層擁護の姿勢を見せざるを得なかった事情は、領内一般に発生して来ていた。⁽⁵⁾化政期は、こうした状態を内部に醸成しながら、その対立が未だ表面化していない。明治二年の賈金騒動は政治的空白期における、まさにそうした村落内部の矛盾の爆発を象徴的に示すものであったろう。にもかかわらず、化政期における

事態は基本的には村方による町方攻撃となつて表われたことの意味は、さらに厳密に究明される必要がある。本稿は、当段階における町と村の基本的な關係を確定するためのささやかな報告である。

註

(1)・(2) 小林家文書「御用留」、文政五年五月。

(3) 前掲『青海―その生活と発展―』一五八頁以下参照。

(付記)

本稿は、昭和三九・四〇年度文部省科学研究費(機關研究)による史料館の共同研究「近世城下町史料の基礎的研究」の分担課題の一部を構成するものである。

現地調査に當つては、糸魚川市教育委員会のご協力を得ることができた。とくに調査の全過程にわたつて終始お世話を下さつた社会教育課主事綱島進氏には多大のご迷惑をおかけした。研究方法その他万般にわたるご指導を賜つた同市の青木重孝氏のお力添えも大きいものがある。現地で直接仕事に協力して下さつた上、種々ご配慮を賜つた新潟県教育委員会指導主事渡辺秀雄氏・糸魚川市文化財保護委員会副委員長丸田活竜氏・同市主事田原喜代吉氏その他多数の方々ともども深い謝意を表する。

次に数度にわたる調査、長期にわたる史料借覽に格別のご便宜を与えて下さつた史料所蔵者・保管者等各位の芳名を記して謝意に代えたい。

小林昭三氏・池原真事氏・山崎隼一氏・不破野道雄氏・大瀬政義氏・田伏地区区長氏・永沢ヤス氏(順不同)